

東南アジアの歴史的街屋建築に関する研究

泉田 英雄

第1章 はじめに

東南アジア海域部は内陸のシルクロードと並ぶ東西交易の要所であり、マラッカ、アユタヤ、ブルネイを始め幾多の港市王国が存在していた。ところが、実際マレイ半島、スマトラ島、ボルネオ（カリマンタン）島、ジャワ島を歩いて見ても、当時の歴史を伝える街並みは非常に少ない。マレイシアとシンガポールの都市景観はどこに行っても連続歩廊のついた街屋から構成されており、それはとても単調で均質である。これまでその成立過程をシンガポール都市計画を通して明らかにし¹⁾、さらにその研究を進展させ、19世紀後半から20世紀前半にかけて東南アジアから東アジアに出現した連続歩廊の都市計画史を整理した²⁾。この研究の中で、連続歩廊は植民地権力にとっては西洋的な統一した街並み景観を造り出すための方法であり、一方、独立国家権力にとっては理想となる近代的な（＝西洋的な）街並みを実現するための方法であったことを指摘した。

この街並み景観を主とした都市史研究に引き続き、その街屋と居住地が実際どのようなものであるか強く興味を持った。西洋の植民地都市や独立国家の近代都市として造られた人工的環境の中で、人々がどのように生活を展開したのかは非常に興味深いテーマである。それを明らかにするために、植民地都市内に開かれた街屋市街地と伝統的港市に住民自ら築いた居住地の街屋建築群を比較研究することにした。東南アジアの歴史的都市の街屋の現存調査もこれが最初のものであろう。

本研究を始めるに当たって、共同研究者の間で次のように用語を定義し、研究範囲を限定した。「街屋」は街路に沿って連続した連続建住宅であり、また「歴史的都市（居住地）」は、少なくとも今から2世紀以前に存在の確認できる都市である、とそれぞれ定義した。調査範囲は、マレイ半島、ジャワ島、カリマンタン島の海岸域に限定した。ヴェトナムのホイアンやハノイなどを含めると調査範囲があまりにも拡大してしまうので、今回の調査範囲から除外した。最終的に、華人街を中心に扱うことになり、基本的文献資料の整理と研究メンバー3人の過去の現地調査経験を基に、歴史的都市を仮説的に次のように類型化し、それを代表する都市（居住地）を調査対象地

に選んだ(図1)。

- ①伝統的港市内に形成された華人街：パタニ(タイ)，ラサム，西カリマンタン一帯(インドネシア)
- ②西洋植民地都市内に形成された華人街：マラッカ，ペナン(マレイシア)，ジャカルタ，スマラン(インドネシア)

第2章 関連文献と既往研究

関連文献資料及び既往の研究論文の多くは、都市社会学や都市地理学から東南アジアの都市化現象や都市性を議論したもので、現地調査を中心にした既存市街地の建築やその生活に関する建築学からのまとまった研究は少ない。

インドネシアの都市に関しては、地理学や社会学の方面からいくつかの著作及び論文が発表されている。代表的なものとしてオランダ王立熱帯研究所編『インドネシアの町(1958)』、ユウエン編『変化する東南アジア都市(1976)』、ナスほか編『インドネシアの都市(1986)』などがあげられる。都市計画及び建築方面からのものとして、ウィドド『変容する華人町：スマラン(1988)』³⁾、プラティヲ『ラサムの建築(1990)』⁴⁾、田原直樹『伝統的市街地における生活空間構造の重層性とその生活変容に関する研究(1990)』などがある。ジャカルタに関しては、デ・ハーンの『古きよきバタヴィア(1919)』⁵⁾は植民地時代の貴重な報告である。カリマンタンはかつて鉱業や森



図1 調査対象都市

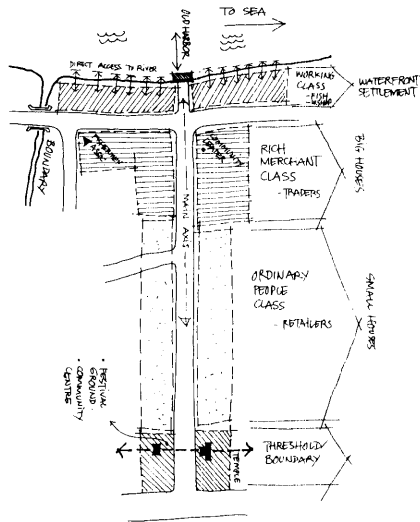


図2 パタニ居住地パターン

林産物輸出を主産業にした華人居住地が多数あったことが知られている。しかし、独立戦争や華人排斥運動の中で多くが消失したと言われ、最近の情報は非常に少ない。

マレーシアの都市形成史や都市建築に関する論文は極端に少なく、コールの『旧海峡植民地と西マレーシアにおける華人建築』⁶⁾が唯一のものであろう。マラッカは東南アジアで最も古い都市の一つで、建築遺産が多く現存するにもかかわらず、その建築に関してはスウィが「マラッカの住宅」⁷⁾と題した短い論文を著しているに過ぎない。ペナンは東南アジアで歴史的街屋が最も多く残っている都市で、現在旧市街地の再開発問題が浮上しており、それに関連して多くの関係記事が現地の新聞や雑誌に見受けられる。雑誌『ペナン』は貴重な報告を多数紹介している。

シンガポールは今回の調査対象から外れるが、比較検討するために関係資料の整理を行った。初期市街地の街屋は、1980年のマスタープランの中で歴史的保存及び観光化の目的のために再開発されることになっており⁸⁾、観光資源及び文化遺産として認められることがあっても、その生活様式は植民地時代以来劣悪な状態としてしか評価されなかった。シンガポールの都市住宅を紹介する著作も以上の視点に立って書かれており、シンガポール公文書館著『パステル・ポートレート(1986)』を始め、L. K. リム『シンガポールの住宅(1988)』、E. キーズ『シンガポールの住宅とその生活(1991)』が1980年代後半から相次いで出版されている。公文書類は今回の調査対象に入っていないが、1927年に設立されたシンガポール住宅改善協会の事業は、東南アジアから東アジアのイギリス植民地に広く影響を与えたと考えられ、今後の関係公文書の研究と整理が待たれる。

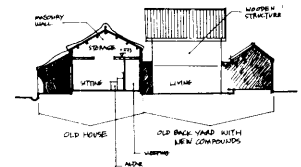
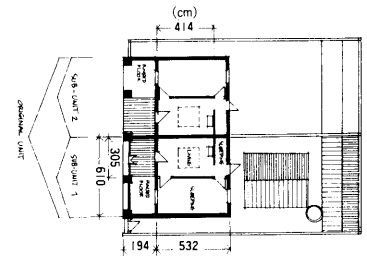


図3 パタニ事例1 (旧カピタン邸)

第3章 都市ごとの状況

3.1 パタニ

パタニは、シャム湾に面したタイ王国南部ソクラ県の下で貿易中継地点として栄えた。17世紀末まで王都は、今日のパタニから3kmほどマレーシア寄りのグルセイ村(Ban Gruesae)にあり、そこにはこのイスラム王国の象徴であるモスクと、華人コミュニティとの共存関係を象徴化した林姐廟が隣り合わせに祭られている。その後、港市はパタニ川河口に移り、華人たちはそこに新たに林姐廟を建立した。

居住地は、川岸と平行に走る道とそれに直交する道に沿って築かれている(図2)。川岸の居住地は家内工業規模の職工街で、一階を作業場や倉庫に、二階を住居にする典型的な街屋となっている。川から内陸に向かう道の沿道には、波止場に近い方をカピタンや有力商人の大型で、装飾豊かな住居が占め、その奥に簡素な造りの一般住民の住宅と店舗が並び、一番奥に廟とコミュニティ施設(林姐記念会館)が置かれている。

住居の数は全部で46戸あり、その内、川岸に沿った街屋は今でも何らかの商売をしているが、直交する街路の街屋の21戸の内18戸は留守の状態であった。平屋建建物は4戸あり、聞き取りの結果これらがパタニで最も古い住居の形式であった。残りすべてが二階建てである。歩道あるいは歩廊はないが、各家の玄関にテラスが造られている。統一的な街並み景観は見られない。これらの街屋を形態から、平屋建形式、大型二階建形式、狭間口二階建形式に類型化し、各1棟実測した。

事例1

4戸ある平屋建形式の建物の内、聞き取りによればこの旧カピタン邸が最も古い。当初左隣の家と一体で建設

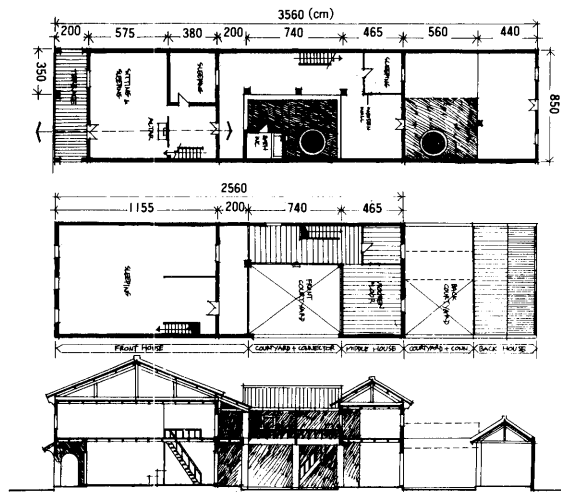


図4 パタニ事例2

され、全く左右対称な形となっている(図3)。実測した住戸の方は、現在所有者である初老の3人姉妹が住んでいる。敷地自体は奥に深い形になっているにもかかわらず、主屋の奥行きは浅く、脇に通路となる空間と裏に広い中庭が残されている。中庭の二階建建物は、最近増築されたものである。

街路と主屋の間には庇で覆われたテラスがあり、かつては右手に少し高い床を築きそこで商売をしていた。主屋は同じ大きさの二つの部屋から構成され、左側の部屋は広間と祖堂といった公的な空間であり、右側の部屋は私的な寝室として用いられている。主屋の奥に中庭があり、鉢植えや水瓶、井戸、便所、水浴場が置かれている。一番奥の棟は竈屋と物置である。

構造について、壁は煉瓦を積んで造られ、開口部回りだけを残してプasterで仕上げられている。窓回りに用いられた赤煉瓦が特徴的であり、他の建物では見ることがなかった。屋根は母屋式小屋組に中国式瓦で葺かれ、両端に向かって少し湾曲している。祭壇の上に開口部が設けられ、かつてその屋根裏に貴重品を保管していた。

事例2

大型二階建形式は計6戸あり、所有者の多くは近代産業の発達した別の大都市に移り住んでいる。実測した住宅は旧カピタン邸の向かい側にあり、住んでいるのは二人の兄弟夫婦の家族で、子供を入れて総勢12人である。建設年代は19世紀後半と言われる。建物は敷地一杯に建てられ、1戸としてはこの地域で最大である。

一階部分だけ1.6mほど道端から後退しているのので、玄関前にテラスが造られている。その左手に露台が置かれ、ここに腰掛けて会話を楽しむ。玄関に入ってすぐの広間の天井にはおよそ1m四方の開口が開けられており、かつてはこの二階の部屋は倉庫として用いられた。最初の中庭は生活サービスの空間であり、浴場、便所、

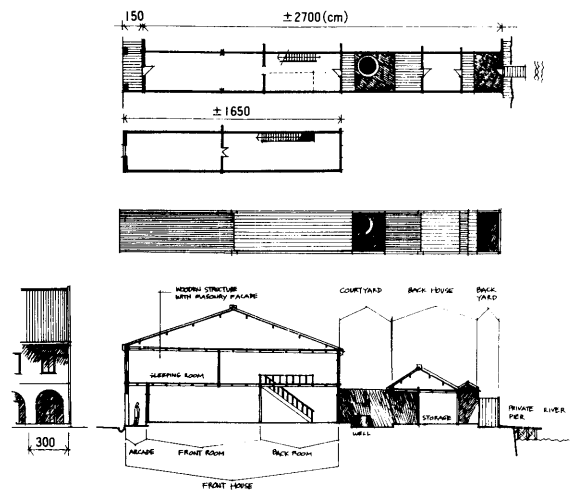


図5 パタニ事例3

水瓶置場、井戸、洗濯場、物干し場などとして使われている。その奥は第二の中庭があり、かつては倉庫と召使いの生活空間であった(図4)。

この建物の屋根はシンガラ(ソングラの古称)瓦と呼ばれる薄い五角形瓦で葺かれ、葺き上がると亀甲模様となる。パタニで最も一般的な屋根葺き材であり、旧カピタン邸の中国式瓦よりも新しく導入されたものであろう。

事例3

川に面した街屋の典型例であり、陸からも川からもアクセスが可能である。現在家族は老夫婦二人だけで、第二次世界大戦以前はここで建設資材販売から建設業まで行っていた。現在の建物も左に連続する4戸とともにその時建てたものである。戦後はこの建物を用いて卸業を営んでいたが、十数年前に引退した。

全体のプランは、前二者と比べると間口が狭く、後方一杯まで建物が占めているのが特徴である(図5)。一階部分には歩廊が形成されており、4戸だけであるがアーケードとなっている。建設当初から祖堂のための特別な場所はなかった。その後方の部屋は寝室で、さらにその奥は小さい中庭、調理場、資材置場と続き、そして川に達する。日中はほとんど下階で過ごし、夜にしか二階の寝室は用いない。

3.2 ペナン

インド洋からマラッカ海峡の入り口に位置する島で、1786年半島側に突き出た岬部分にイギリス東インド会社の商館施設と、その南側に現地人居住地が開かれた。その後、現地人居住地は内陸側に拡大していき、現在華人を中心として約20万人の人々が街屋に生活している(図6)。初期居住地はおよそ1.5km四方の地域であり、現在埋立てによって海岸から100mほど内側に入っている。初期居住地は木造の建物によって占められていたため、19世紀

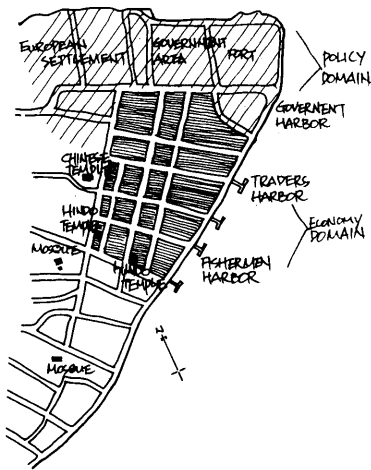


図6 ペナン居住地パターン

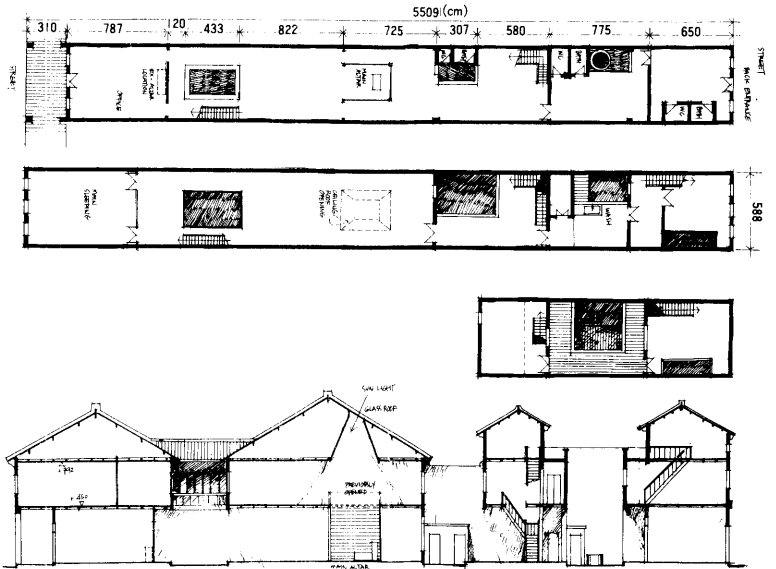


図8 ペナン事例2

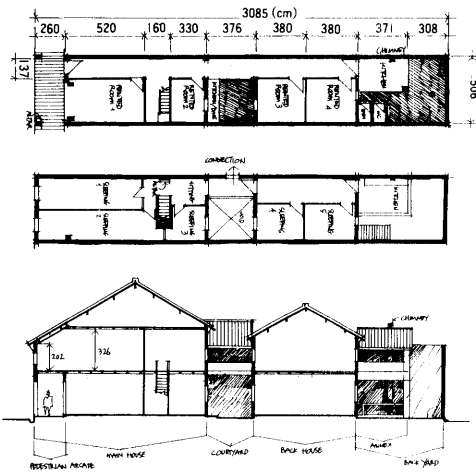


図7 ペナン事例1

表1 ペナン通り一階部分の利用形態

事務所	22	保険会社	4	自動車販売	1
卸・小売業	15	クリニック	3	金舗	1
繊維販売	14	旅行代理店	3	写真屋	1
住宅	10	薬局	3	ビデオ貸屋	1
雑貨店	8	廟・宗祠	3	ホテル	1
飲食店	7	内装・家具	2	建設	1
貿易	5	銀行・金融	2	空き家	5
印刷業	4	洗濯屋	2	合計	118

た(表1)。その結果、現在この街路沿いの産業のほとんどが自営業であること、第二は印刷業と事務所の一部を除くと周辺住民を相手にしていることが分かった。

これらの職業の立地について、飲食店と薬局がそれぞれの街路交差点付近を占めていることが特徴的である。この二つが下町の住民にとって重要な施設であり、そのために便利な位置を占めているのであろう。飲食店は四六時中人々で賑わっており、周辺住民の台所としてばかりではなく、コミュニケーションの場にもなっている。このような調査を発展させれば、都市内地区の特性や華人の居住地の社会的組織を知ることができるであろう。

視察した12軒のファサードと平面プランに基づいて3形式に分類し、それぞれの形式1戸を実測した。

事例1

これは初期庶民街屋型と呼ぶことができ、二階部分の軒高が低く、またマラッカ瓦と呼ばれる薄い半円筒形の瓦で屋根が葺かれ、ペナンの街屋の中で最も古い形式であると考えられる。現在の所有者は家族とともに二階に住む一方で、一階部分を4部屋に区分して貸し出している。歩廊に面するところには就職斡旋業者あつせんが入り、その奥の3部屋にはそれぞれ1家族入居している。一、二階合わせて14人が生活している。

街路に面する一階部分は連続歩廊の一部となり、奥行き深い平面形状をしている(図7)。歩廊に面した部分

前半何度も大火のため焼失した。耐火造に建て替わるのは海峡植民地の成立(1867年)以降と考えられ、今日現存している建物にそれ以前のは確認されていない。また、街路に面した規則正しい連続歩廊も当初はなかったもので、これも海峡植民地の設立とともにシンガポールからもたらされたのであろう。

現在ビーチ通りとペナン通りを中心とした華人街はかつての賑わいを失ったが、空き家は見られず落ち着いた下町の観を呈している。建物は二階または三階建ての建物で、一階部分に事務所や店舗が入り、二階以上が住居となっている。連続歩廊が街並みにある種の規則性を与えてはいるが、階高、柱の形状、仕上げ材などによりかなり差異が見られる。これは19世紀半ば以降建物が数回にわたって更新されてきたことを示すもので、形態と平面に基づいていくつかを類型化することができるであろう。

二階以上は普遍的に住居として用いられている一方で、一階部分は実際どのように利用されているのか、ペナン通り両側の建物118件に対して試行的調査を実施し

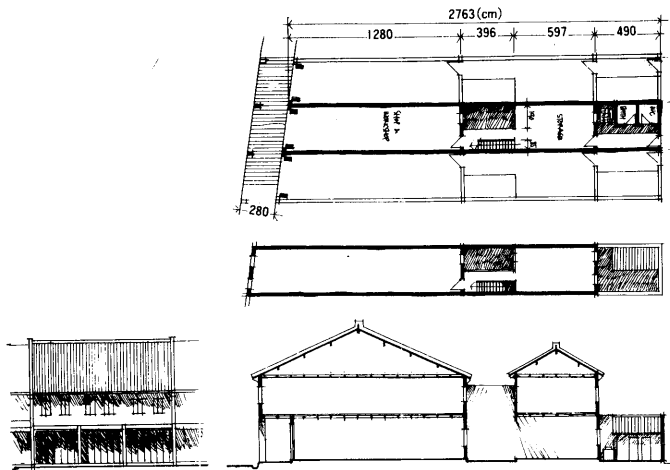


図9 ペナン事例3

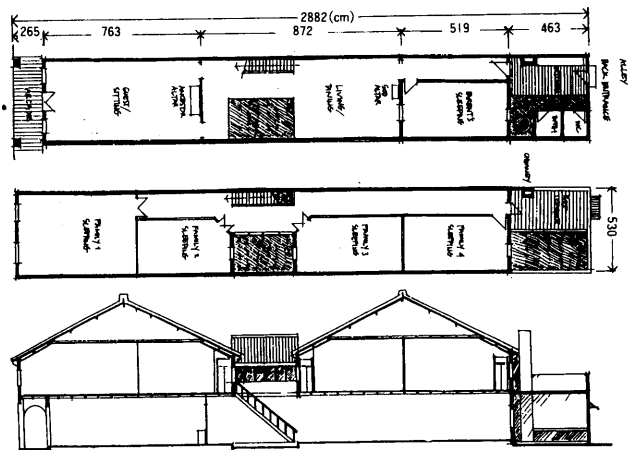


図10 ペナン事例4

はかつては店舗であった。そのすぐ奥の中庭はテナント2戸が食堂や居間として用い、一番奥の中庭の調理場と便所は全テナントの共用空間になっている。かつては後方の住戸と背中合わせになっていたが、20世紀前半に裏小路が造られた。

台所を共同で使っているが、時間が重なって込み合うことはないという。というのは、私たちが訪問していた半日においても、お湯を沸かすだけで、食べ物は近くの食堂から買ってきて食事していた。調理場と便所を3家族が共同利用し、3.5m四方の広さの部屋に親子3人が住んでいる状況は劣悪な住環境に見られがちであるが、外食中心の食生活、住居と職場の近接、温暖な気候などを考慮すると、このような生活は熱帯都市居住に適応したものなのかもしれない。

事例2

この形式は天井高、二階軒高ともに十分に高く、また一階ファサード部分は化粧タイルと彫刻扉で飾られ、個人の住宅としては上等なものである。実測した事例は、植民地権力官庁街に近いところに有力華人の一人によって建設され、建物も規模と装飾においてペナンで現存する街屋の中で最もすばらしいものの一つである。間口幅は他とほぼ同じであるが、奥行きはおよそ2倍ある。街路に面した連続歩廊も、これまでの事例の中で最も広い(図8)。

現在所有者はインド系の人であるが、ほとんど改造されておらず、事務所兼住居として使用されている。居住者は夫婦、母親の3人、それと使用人一人を加えて計4人。当初の状態のまま間仕切り壁を設けていないため、事例1とは対照的に非常に広く閑散とした印象を受ける。一階部分では入り口の近い方が接客や商売のために使われ、奥に広い中庭と大きな祖堂があり、特異なのは祭壇上部が吹き抜けになっている点であり、天窗から日光が入るようになっている。一番奥は水場や使用人

室や倉庫である。二階は完全に家族の生活空間に、また三階部分は倉庫と屋上テラスとして用いられている。

事例3

この形式は間口が狭く、多くの場合作業場として使われているのが特徴である。特にビーチ通り300番より大きな家屋番号のあたりに多く見られ、この例の場合には一階で籐加工と販売を行っていた。左側の家の一階は電気製品の販売修理業を営んでいる。かつてビーチ通りが波止場に面していた時、この辺は船具類の製造・修理工場が軒を並べていたところで、その名残であろう。

間口幅が狭く、当初から間仕切り壁も祖堂もなく、職工人のために造られたらしい(図9)。奥は中庭があり、資材置場として使われている。一番奥には便所と浴室があり、汚水は裏小路の下水道に流されている。台所はなく、職人たちは屋台で食べる。二階の大部分は製品置場になっており、また籐職人二人が寝泊まりしている。この事例は、初めから職工階層専用として建設されたのであろう。

事例4

これは専用住宅型で、初期華人居住地や主要街路沿いには見られず、ペナンではレーン(lane 小路)と呼ばれる街路に沿って造られている。実測した事例は初期華人街のすぐ裏手のスチュワート小路にあり、所有者は市の有力華人の一人。3姉妹が結婚後も両親とともに生活しているので、総勢22人の大所帯。平面の大きさは、事例1とはほぼ同じ大きさである(図10)。

客間の両側には螺鈿細工の黒檀の椅子が20脚ほど並び、その正面に大きな祖堂が置かれている。その奥の中庭が家族の居間となっている。両親はこの居間の奥の部屋を寝室として使っている。一番奥は、便所と浴場と調理場からなる水場である。大所帯の割に調理場が込まないのは、この家でも外食が多く、全員揃って食事することは週に1、2度であるらしい。

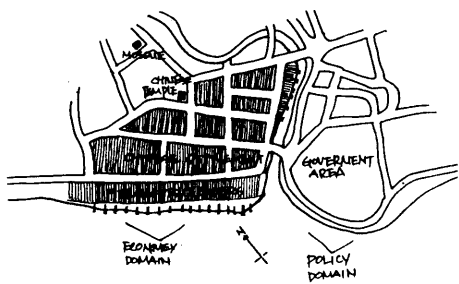


図11 マラッカ居住地パターン

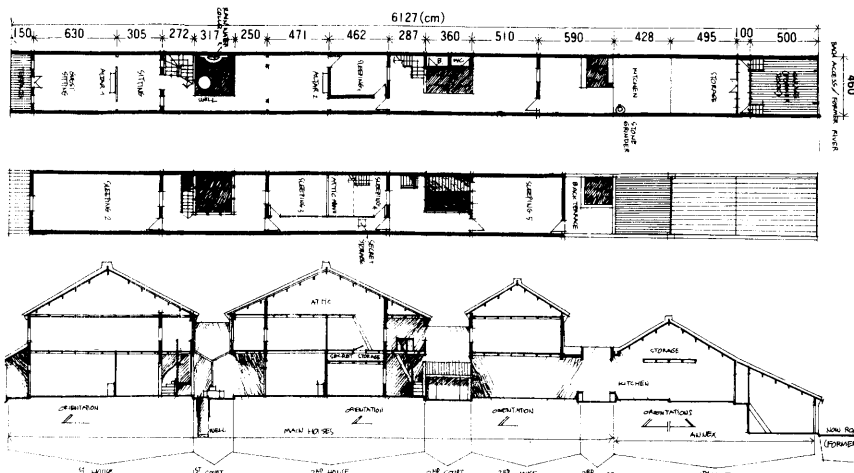


図13 マラッカ事例2

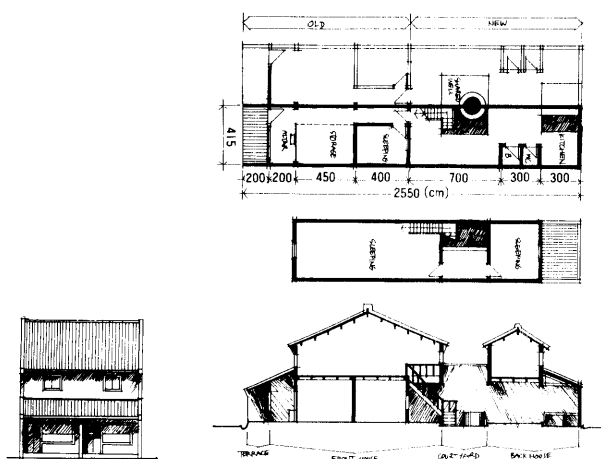


図12 マラッカ事例1

ペナンでは、初期居住地を取り囲むように以前の街屋と同じプランで専用住宅が建設された。共通して手の込んだ彫刻や家具を備えており、初期居住地における商売に成功した人々が中心街の外周に専用住宅を建設して引っ越してきたものだと考えられる。

3.3 マラッカ

ペナンと同様、高台から眺める初期市街地は赤いマラッカ瓦で葺かれた街屋の海である。14世紀末マレイ王によって港市が築かれたが、1511年にポルトガルとの戦いで全焼した。恒久的な都市建設はポルトガルによって行われ、マラッカ川東岸の高台周辺に要塞型商館施設が置かれ、またその対岸に華人を中心とした現地人居住地が開かれた。この地域にポルトガル時代に建てられた建物は、1641年のオランダ東インド会社軍との戦いでほとんど焼失してしまい、一つも現存例が確認されていない。今日残っている街屋すべては、オランダとイギリス統治時代に建設されたものである。

居住地パターンは、次の三つに分けることができる(図11)。一つ目は海岸線と平行に走るトンタンチェンロック通り(旧 Heeren st.)とグランガン通り(旧 Yongker

st.)に沿った一帯で、中国風に豊かに装飾された家構えからここが華人たちの中心的な商業地であったことが分かる。特に旧海岸線とトンタンチェンロック通りに挟まれた奥行きおよそ60m、長さ1kmの間にはすばらしい街屋が並んでいる。現在多くの街屋は営業をやめ、もっぱら住宅として使われていたり、空き家になっている。また十数戸が観光客向けに土産物屋や骨董品屋になっており、その内3戸は古い街屋を再利用している。

二つ目はマラッカ川に沿った細長い地域で、現在倉庫が並んでいたり、一階部分で華人たちが機械販売修理や乾物卸販売などを営んでいる。三つ目は前二者の地域の裏側にあり、仏教寺院やヒンドゥ寺院やイスラム寺院などの古い宗教施設が集中しており、植民地時代から各民族の雑居地域であった。一階部分は日常生活用品店や飲食店などとなっている。二つ目の地区と同様、この街屋も構造と材料から20世紀以降に再建されたものであるのが分かる。この街屋は、そのファサードの形態と材料から三つに類型化することができそうである。

事例1

この形式は、トンタンチェンロック通りの始まる地点近くの2連のものが唯一の現存事例である。西洋建築の要素は全くなく、また木梁やマラッカ瓦といった材料や板窓とテラスの造り方から、この形式はマラッカに現存する最古の街屋形式であろう。17世紀末オランダ外交使節団が南京で見聞したものと酷似している(図12)。

奥行きがそれほどないのは、イギリス植民地時代に後方に衛生改善や防火・消火のために裏小路が通されたためである。道端に下屋を出して、テラス空間を造り出している。テラスから中に入った空間はかつては間仕切りがなく、店舗として使われていた。ここでも、中庭回りは家族生活の中心スペースである。このの井戸は左隣の家と共同で使用するようになっている。

事例2

この形式はトンタンチェンロック通りと海岸線に挟ま

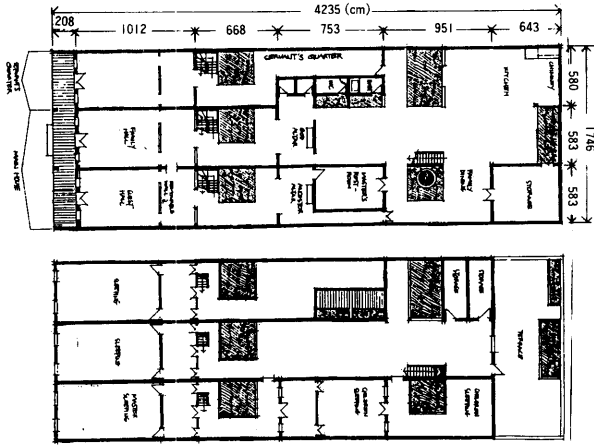


図14 マラッカ事例3



写真1 マラッカ、二階階段併置型

れた地区に多数存在し、手の込んだ中国風装飾、左右対称のファサード、室内に西洋建築の要素、そして奥行き
の深さに特徴がある。視察した4戸は、建設年代が19世紀初頭から末までと幅がある。実測した建物は、現所有者の曾祖父が建設したもので(19世紀後半)、当時は裏に海岸が迫っていたという。

奥行きは今回実測した建物の中で最も深い。内部に三つの中庭が置かれ、一番裏は船着き場であった(図13)。玄関を入ったところは広間で、豪華な祖堂や調度品が置かれている。その奥の第一の中庭の周りにも家具と調度品が置かれ、公的な場であることが分かる。井戸には雨樋を通して天水を導くようになっている。現在は第二の中庭回りが家族の生活空間となっており、一番奥は調理場と倉庫である。二階はすべて寝室として使われている。

事例3

この形式が事例2と異なる点は、二階部分がテラス上に張り出していることと、奥行きがそれほど深くないこと、ファサードに西洋建築の要素が使われていることである。市内で最も多く見かける形式で、ペナンの事例4(専用住宅型)に酷似する。実測した事例は1896年に3戸1連で建設され、他にこの通りに四つの例がある。それぞれ別に玄関が設けられているが、内部は一つの住宅である(図14)。現地研究者によれば、オランダ植民地時代

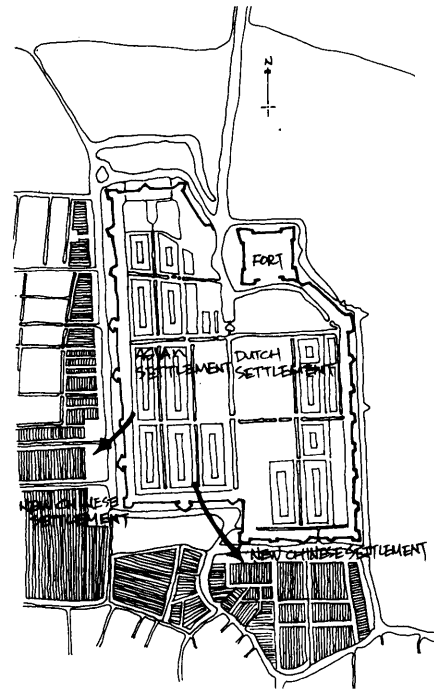


図15 18世紀までのジャカルタの居住地パターン

に間口約4.5mが1戸の標準幅と決められ、それを超すと税金が極端に高かったので、このような造りにしたと言われている。

事例4

この形式は初期市街地外周に多く見かけ、クアラルンプールにも多数存在している。1920年代シンガポールの住宅改善協会が建設したタウンハウスと酷似し、特徴は二階以上を賃貸できるように街路に面して階段が設けられていることと、奥行きが浅く1カ所の中庭に調理場、便所、浴場が置かれていることである(写真1)。

3.4 ジャカルタ

ジャカルタの都市の歴史は、15世紀バジャジャラン王国によってチリウン川の河口に築かれた港市スングクラパに始まるが、現在に通じる恒久的都市建設は1619年オランダ東インド会社が占領してからである。オランダは運河を縦横格子状に掘削し、およそ1.50km×2.25kmの地域に城壁を築いた。今日コタと呼ばれる地域である。その中央を流れるチリウン川の東側半分を自らの居住地に、一方西側半分をポルトガル人や華人の居住地に定めた。市内で、市庁舎や市場などの行政・公共施設を除くと他は街屋群が占め、オランダ東インド会社が建設し分譲したと言われている。

デ・ハーンによれば、初期に華人たちもこの街屋に住み、そしてそれをまねて自らの街屋を建設するようになったという。現在、市内に18世紀以前に建てられた街屋が残されていないので、以上の説の妥当性を検討することはできない。しかし、オランダ植民地権力に強く管理された地域内で、彼らは自由な建設活動はできなかったはずで、オランダ式街屋を自らの住居として受け入れていたのかもしれない。1717年、バタヴィア市政府が華人たちに街屋の前面に庇のついたテラス(bovenstoep)

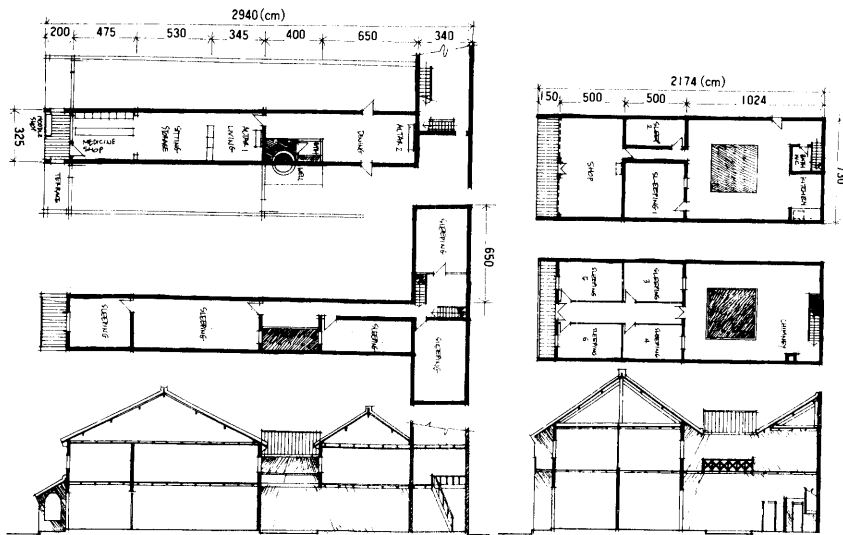


図16 ジャカルタ事例1

図17 ジャカルタ事例2

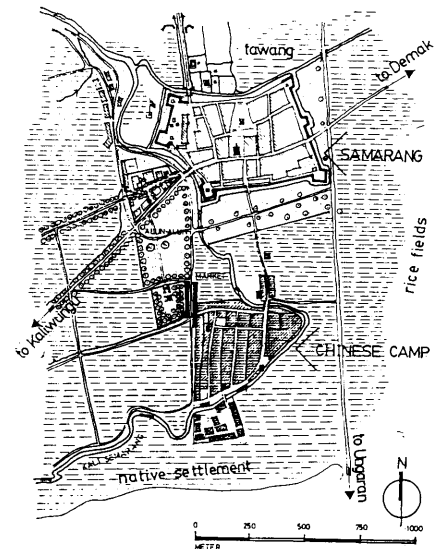


図18 17世紀末のスマラン

を造ることを禁止したこともその一つであろう。

1740年の華人大虐殺の際、華人たちは離散し、その後市内には土地を所有することはできなくなった。代わってインド系やアラブ系住民が不動産を持つようになり、華人は建物を賃借りして生活と商売を再開した。まともな華人街屋が残っていないのはそのためであろう。新たに華人街となったのは城外南部地区で、今日グロドックと呼ばれ、様々な製品の卸・小売業地区となっている。卸業の多いのは後背地に多大な人口を抱えていることによるものであり、マラッカ海峡沿岸やカリマンタン沿岸の港市にはない、ジャワ島北海岸港市の特徴である。そのため、ひっきりなしに大小様々なトラックが出入りし、慢性的な交通渋滞を引き起こしている。また、卸業に付随する仕事を求めて、近くにたくさんの人が住み着き高密度居住地となっている(図15)。

したがって、コタ周辺に現存する街屋は所有者及び建設者の多くが華人でなく、また当初から賃貸目的で建設されたものが多く、さらに1960年代に華人排斥運動もあって改造・更新が著しい。そのため、街屋を外観と平面から類型化することは難しく、今回の調査ではとりあえず間口幅から古いと思われる建物を類型化してみた。

一方、コタ周辺におけるオランダ人の街屋は、いくつかの例外を除くと住み手がなく荒廃している。小屋組は明らかに中国のものとは異なり識別が可能であるが、平面等については調査できなかった。

事例1

狭間口形式と呼ぶべきもので、旧城壁のすぐ南側のグロドック地区のプルニアガン通りに面して建っている。この街屋はこの通りで唯一の小売店で、店先で奥さんがそば屋を、その奥で旦那が漢方薬屋を開いている。特に古いと見られるのは、マラッカの事例1と同じテラスと板窓の造り方、加えて漢方薬を仕舞う黒檀製の棚である。

下屋型のテラスは、両側とは連続していない。

周囲のものに比べると間口が狭いが、奥行きはほぼ同じで、広間一中庭一水場という内部の空間配置をとる(図16)。特異な点は、一番奥が隣の家と通じて複雑な平面プランとなっていることで、頻繁に所有者やテナントが替わったり、また華人排斥運動時に避難路を確保した結果なのであろう。

事例2

間口が広い形式で、ジャンバタンリマ地区のマンショール通りに多く現存する。実測した建物の所有者は代々アラブ系の人で、19世紀末華人請負が建設したと言われている。現在華人家族が借りており、下階では副業としてプラスチック製品の卸を、また店先を倉庫として使っている。出入りはもっぱら片側の小道から行っている。間口幅7.30mに対して奥行きが21.74mと浅いのは、建設当時の敷地割りによるものであろう(図17)。玄関部に1.50mのテラスがあり、そこを入ると店舗兼倉庫になっている。

3.5 スマラン

ジャカルタとスラバヤに次ぐジャワ島北岸の大都市で、河口から約1km 遡った蛇行部分に高密度の華人居住地が築かれている。もともとマタラム王国領内の1港市に過ぎなかったが、1678年オランダ東インド会社は内陸からの物産の積み出し基地を建設するためにここに土地の割譲を受けた。会社は城壁で囲んだオランダ人居住地を建設し、また自らが必要とする商取引や運搬や日常生活のサービスを担わせるために、華人たちを上流に住ませた(図18)。1740年バタヴィアにおける華人大虐殺を契機として、スマランの華人たちは防衛のために居住地の周囲に城壁を巡らした。最終的には東インド会社によって鎮圧され、18世紀を通して華人街は会社に間接的

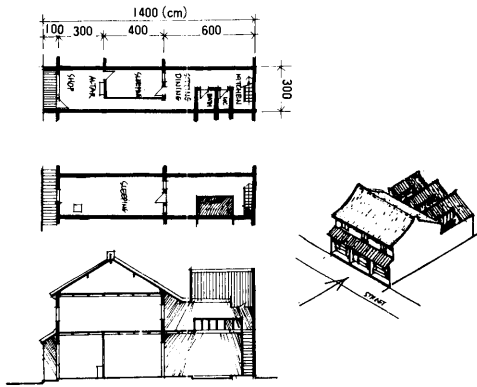


図19 スマラン事例1

に管理されながら、スマラン川を往来する物産を扱うことによって存続していた。

19世紀初頭、イギリス軍によってオランダ植民地権力の城壁は取り壊され、また海岸線に沿って東西に大郵便道路が建設され、経済活動に好機が訪れた。しかし、それは長く続かず、再びオランダは支配者として戻ってくると、1821年に華人に旅行規制を布き、さらに1841年からは居住地規制を施行した。そのため居住地内の人口密度が高まり、平屋が二階建てになり、または1戸当たりの間口が狭くなった。1915年居住地規制は廃止され、現在ジャカルタと同様、後背地への物資輸送の基地として狭い街路にトラックが溢れている。

街屋は間口幅に応じて、二つの形式に類型化できそうである。

事例1

この形式は主街路から離れたところに現存し、間口幅3m前後に対し奥行き14m前後の大きさがあり、すべて二階建てである。実測した事例は3連の建物の一つで、これらは一緒に建設され、貸し出された。この場合前面で雑貨屋を営んでいるが、住宅専用となっているものもある。街路沿いにはテラスが設けられ、客はここで商品を受け取る。その内側の部屋に商品を並べ、奥に祭壇がある。その奥は華人街屋の典型的な空間配置に従って、寝室と中庭が続いている(図19)。建設年代は不明であるが、19世紀半ば居住地内に人口密度が増大した時期、1戸当たりの面積を小さくして建設されたのであろう。

事例2

旧華人街では間口5m前後の建物が最も多く、ほとんどが主街路に沿って建っている。この事例は最も古い街路に沿っており、そこに19世紀末現在の所有者の祖父が左側の2戸分を建設した。後に商売の成功と子供の結婚とともに右側へ次々に増築し、今日のように4連の建物になった(図20)。現在の所有者は郊外に工場と住宅を持ち、この建物は日中商用や家族の出会いの場所として用いている。そのため、一階広間の祖先を祭った部屋と二階奥の家族神を安置した部屋は、当初のままきれいに保存さ

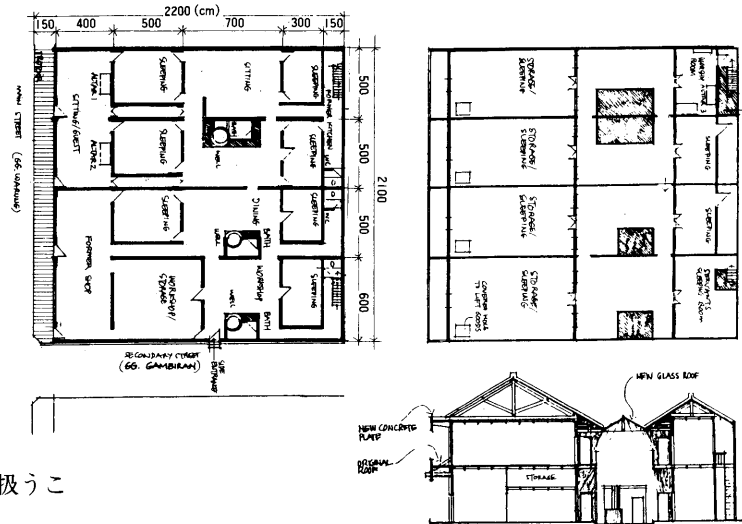


図20 スマラン事例2

れている。

街路沿いにテラスがあり、その奥に広間、祭壇、寝室、中庭(居間・食堂)、水場、倉庫・使用人室が並んでいる。階段の位置はジャカルタの事例と共通するが、十分な間口幅がありながら中庭は片側に置かれている。特異な点は、各部屋の入り口が左右の壁にはなく、すべて前後の向きにあることである。周囲は卸問屋街になっているため前の街路を日中車両が忙しく往来しているが、この建物の中庭に入るとその喧騒は嘘のようである。

3. 6 西カリマンタン

18世紀末、客家系華人たちがサンバス王国から土地を譲り受け、港市、鉦山町、森林産物集積地などの居住地を建設していたことが知られている。このような自治居住地は、その後オランダ植民地権力や独立国家権力による弾圧によって離散したと言われている。18世紀半ばの地図によれば、海岸近くにムンパワ、内陸にマンドール(職工長)やモンテラド(宝石の山)といった都市が存在していた。このスペイン語の名前の由来については不明である。

現地調査の結果、州都のポンティアナックと次に大きなサンバスやシンカワンといった都市は近年耐火造で市街地が再建されたところで、それ以前の姿は不明であった。興味深かったことは、ポンティアナックの街屋は川岸に木杭の上に煉瓦造で建設されていたことである。また、シンカワンは1930年代に内陸都市からの移民によって新たに建設されたところで、シンガポールのように直線で格子状に街路が配置され、アーケードのついたショップハウスの街並みが形成されていた。内陸都市のモンテラドは廟や墓を残してそっくり消えてしまっており、またマンドールは華人に代わってダヤック族の人々が街屋に居住していた(写真2)。

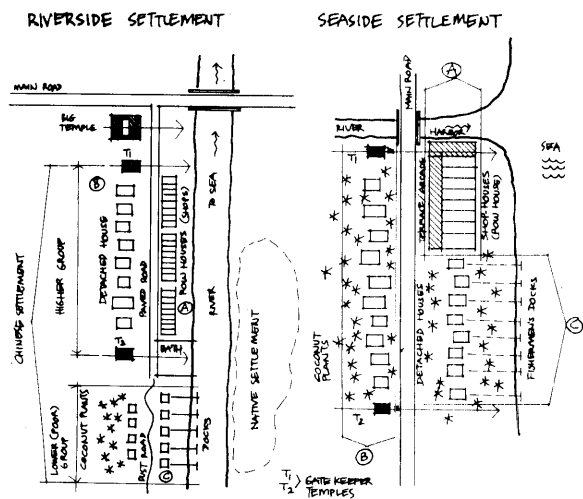


図21 西カリマンタンの居住地パターン



写真2 マンドール、ダヤック 写真3 ムンパワ、客家の街屋族の街屋

ムンパワやスンガイピニューなどおよそ6カ所の居住地は木造街屋で構成されていたが、廟を除くと19世紀にたどれる建物を見つけることはできなかった。その理由として、この地域の街屋は基本的に木造で建設されており、動乱の際に焼失してしまい、ここ数十年の間に再建されたらしい。

居住地は、一般に河岸沿いの街屋（連続建家屋）と街路を挟んだ反対側の一戸建家屋から構成されている（図21）。街屋も一戸建家屋も基本的空間構成と形態は同じであり、ともに間口幅4.5mに奥行き13.0m ぐらいの規模であった。特異な雰囲気を持っていたのはスンガイピニューとムンパワの居住地で、客家系の華人が非常に整頓され秩序立った街屋に住んでいた（写真3）。

西カリマンタンにおいて、街屋と一戸建家屋がどうして全く同じ形態なのか非常に興味を覚えたが、歴史的資料や現地調査の不足により十分考察できなかった。仮説として、華人移民によって森林産物集積地や鉱物採掘地、いわゆるブーミングタウンの汎用建築として初めから連続建家屋を建設し、ブームの消滅とともに周辺に離散した住民たちは街屋居住の習慣に従い一戸建家屋を建設していったのではなかろうか。特に、客家の人々は団結力が強いので、ブームが去っても農漁民として連続建家屋を維持していると思われる。ここに、東南アジア海域部（マレイ世界）における居住地形成のプロセスを明らかにする鍵があるように考えられ、分析の中で考察してみたい。

第4章 分析

4.1 都市(居住地)形成について

東南アジア海域の都市(居住地)形成史を考えるに当たり、西カリマンタンの事例は大きなヒントになった。定住人口が少ない地域であったが、古来からの人の移動によってどこにどのような資源があるのか情報が行き渡っていた。この場合の資源とは、森林産物、海産物、鉱物といった物質だけに限らず、風待ちや物産集散に適した港などの地理的条件の良さも含む。そこに外部世界からの需要が起きると、かつて細々と採集が行われていたところに、ブーミングタウンが形成された(クアラルンプール、モンテラド、マンドールなど)。また、集積や積み出しのための中継拠点も必要となり、伝統的港地権力の下に港市が形成された(パタニ、マラッカ、スダクラバ、ムンパワなど)。これがおそらく、東南アジアの原初的な居住地と都市形成のプロセスであろう。ブーミングタウンは労働力として中国からの人々を受け入れ、管理の効率から単民族構成となりがちであった。一方、港市は輸出・分配拠点として多民族が居住するようになった。

ジャワ島北岸の港市は、オランダ植民地時代に他とは違う成長を遂げていった。その大きな理由は内陸に大きな人口と植物資源を抱えていたことで、特にオランダの植民地時代における人口増加によって海岸の植民地都市から輸入物資が内陸へ送られ、また農業開発によってプランテーションの作物や木材がここに送り込まれるようになった(バタヴィア、スマラン、スラバヤなど)。そのための便宜を提供したのが華人たちであったが、彼らの存在が大きくなるとオランダ植民地権力は様々な規制を設け、そのことがジャワ島北岸の華人街を個別に変形させることになった。

4.2 居住地パターンと街路について

(1) 居住地パターン

調査開始時点で、街屋の存在する歴史的都市を伝統的港市権力の下で形成されたものと、ヨーロッパ植民地都市内のもとのに分けたが、調査の結果、居住地パターンに関して有効でないことが分かった。都市形成に関する分析の中で述べたように、これら以外にフロンティア型というものがあり、新たに発見された資源の獲得基地やその集積基地として、ほとんどどこの権力の支配も受けずに華人たちによって建設された。

図21のように、水運を利用するために岸に沿って初め街屋が建設され、次に裏の通り沿いに定住者用居住地が開かれていった。通りの両端の入り口には小さな廟が築かれ、警備小屋を兼ねた。建物は現地の木材や植物を利用したものである。資源の枯渇や政情不安によってフロンティア型居住地が打ち捨てられると、かつての居住地

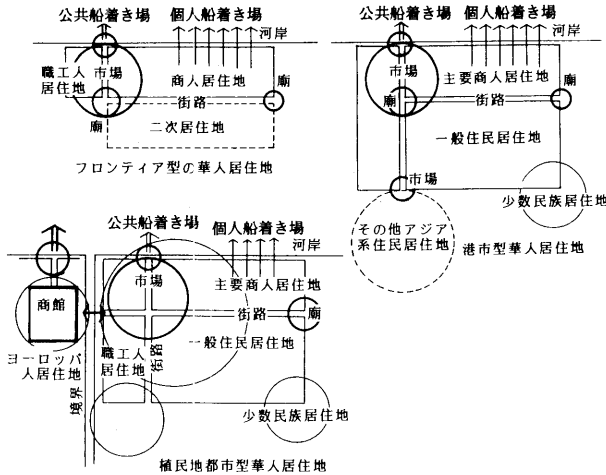


図22 居住地パターンのモデル

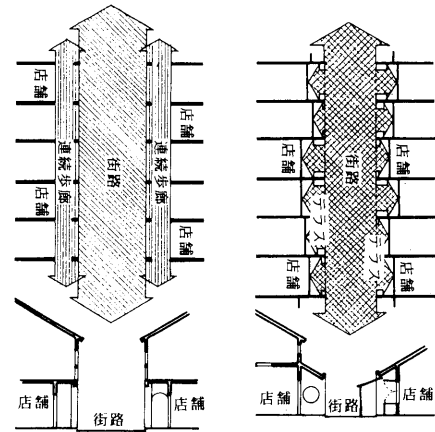


図23 街と住戸の関係

パターンを維持しながら人々は農漁業などの定住的産業を営むようになった。このような典型例としてムンパワ、スガイピニュー、マンドール、モンテラドなどをあげることができ、おそらく初期のクアラルンプールやタイピンなども含まれるであろう。

第二は仮説としてあげた伝統的港市型の居住地パターンで、基本的にヨーロッパ植民地権力もそれを継承した。その典型としてマラッカがあげられ、特徴としては、伝統的港市権力や植民地権力から貿易活動の正式な許可を得ているから、より恒久的な居住地であった。図22のように、海岸または河岸に有力商人の船着き場が開かれ、その脇は公的船着き場となった。船着き場から内陸側の奥に廟が置かれ、この二つを結ぶ沿道は市場となった。この周囲が職工や荷役労働者の階層が住む居住地となった。現地港市権力下の例としてパタニ、プケット、初期マラッカ、パンテン、スダクラバ、ラセム、トゥバンなどがあげられ、またヨーロッパ植民地権力下の例としてマラッカ、ペナン、シンガポール、初期バタヴィア、初期スマラン、ラセムなどがあり、特にイギリス植民地都市では居住地パターンがよく継承されたようだ。

オランダ植民地支配下のジャワでは、1741年以降華人居住地は形態的にも経済的にも様々な規制を受けるようになり、そのため各居住地はそれぞれのパターンを歩むことになった。バタヴィア近郊では華人たちは建物賃貸者となり、華人居住地の特徴の希薄なところとなった。一方、スマランはオランダとの戦いの際、城壁を巡らし、非常にコンパクトで団結力の強い居住地となった。

(2) 街路

華人街では海岸あるいは河岸はもっぱら物資の積み降ろしの場所であり、有力商人の船着き場と公的船着き場から構成される。したがって、ヨーロッパ諸国の植民地都市や条約開港場に見られるプラヤ(マカオ、ホンコン)やバンド(上海や横浜など)は、その名前の通り華人居住地の伝統ではなかった。主要街路は、この公的船着き場

から廟までの間に形成され、その沿道に市が設けられた。もう一つの街路は、河岸の有力商人の街屋の裏側(実際は表側)に沿って造られ、ここは商取引の場である。

このように、華人街は最初直交する2本の街路から造られていった。そして、この街路に沿って商人に雇われた労働者や小規模商人たちが、最初は一戸建家屋で建て、次いで人口の増加とともに連続建形式の家屋を建設するようになった。二次街路は60~70mの間隔で造られ、それは奥行きおよそ30mの基本モデルが背中合わせになった長さである。裏小路は、旧イギリス植民地で見られたように衛生改善や防火・消火対策、さらにおそらく治安改善を目的にして植民地権力によって造られた。格子状の街路配置は、東南アジアの都市の場合、植民地都市や近代化事業のなされた都市のものである。

4.3 街屋について

(1) 街と住戸の関係

東南アジア都市部における街屋の最も大きな特徴は、住戸の前面部分と街の関係である。一階の正面部分はほとんどの場合店舗であり、二階は倉庫や住居として使用されている。そのため、しばしば一階店舗の上の二階床または天井には約1m四方の開口部が開いている。店舗の前面には軒または庇で覆われたテラスが設けられており、幅は1.6mから2.6mまで様々である。このテラスの形態は次の二つに類型化できるであろう(図23)。第一は、自らの住戸部分だけ軒や庇を延ばし、床に石またはタイルを貼る。古い例では店先の大きな窓戸を上下二分して開けるようになっており、日中下の板を外側に水平に倒してその上に商品を陳列していた。第二は、一階部分を道端から一定幅後退させ、そこに連続歩廊を造り出すものである。この場合、連続歩廊は各土地の所有者のもので、都市計画の規則によって公共のために拠出されている。そのため、個人の活動は規制され、また統一的街並み景観を造り出している。公共連続歩廊としての役割を

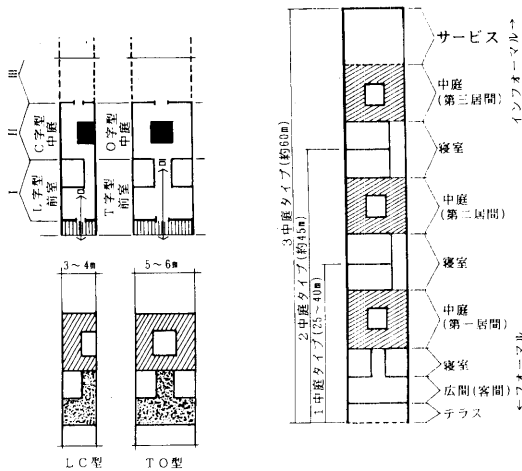


図24 住戸の基本モデル

図25 住戸の空間モデル

担わせるには、ペナンの場合のように最低2.5m以上必要であろう。

このテラスまたは連続歩廊を境界にして、各住戸奥までの空間特性は公的空間から次第に私的空間へと変化する。このことによって、外(居住地)と内(住戸)の関係が、連続する都市の中に統合化されることになる。言い替えば、華人街は縦糸の住戸を横糸の街路で織り合わせたものなのである。

(2) 住戸について

今回の調査から、華人街屋住戸の特徴を次のように整理した。一つは家族生活の中心は中庭回りにあることで、部屋は就寝と貴重品の保管にしか用いられない。第二は部屋は必ず中庭に面して造られ、通気と採光のために窓が設けられている。この原則を守りながら、奥に長い形態が出来上がっている。その構成について、次のようなモデルを導き出した(図24)。最も基本となる中庭は、中央に置かれる場合をO型と名付けることにする。これに対応して、前面にT型の広間が置かれ、全体で左右対称の配置となる。これをTO型とする。この形式は居住地がまだ十分に広がった場合、また富裕商人階層によって住まれる(図25)。居住地の土地が狭くなったり、または職工階層は、TO型を対称軸に等分したような住戸に住む。中庭はC型、広間はL型になり、これをLC型と呼ぶことにする。パタニやマラッカの初期街屋には実際にTO型を縦に2等分にした例が見られたが、しかしペナンの事例に見られるように次第に初めからLC型として建設されるようになったのであろう。

住戸の空間は三つの部分に分けることができる(図25)。第一は家族の生活のための中庭で、華人街屋の住戸に不可分の部分である。ここで、家族生活のあらゆる部分が営まれる。ジャカルタの二階建ての事例では、屋根まで開けられた開口部が彫刻で装飾されたものがあり、特別な意味を持っているのであろう。これは、福建人の多いマレイ半島の華人街屋では見ることができなかったも

ので、ある華人民族に特徴的なものかもしれない。

二番目は住戸前の広間で、商売や接客として使われ、奥には祖堂が置かれる。寝室はこの広間と中庭の間に置かれる。三番目はサービスのための後屋で、必ずしも一定の形をとるものではない。特に土地の奥行きが深く、裕福な大家族の場合には、奥に第二、第三の寝室と中庭を設け、60mに及ぶ街屋を造った。

旧イギリス植民地のマレイシアとシンガポールでは、今世紀に入って施行された都市計画の規則によって、街屋に新たなデザインが生まれていった。第一はかつては中庭回りにあった便所と調理場が後屋に置かれるようになり、また背中合わせの街屋の間には裏小路が造られるようになった。この目的は衛生改善や防火・消火対策に加えて、かなり治安改善の要素もあったのであろう。第二は、二階以上を賃貸するための街屋の場合、連続歩廊から直接出入りできるように階段の設置が義務づけられた。

このように20世紀に入って街屋の外観はデザインを変えたが、基本的な内部の造り方は維持されていった。

第5章 今後の課題

東南アジアのマレイ半島からジャワにかけての歴史的都市の街屋の現存状態と、その居住地パターンや空間構成などを類型化した。今後このような街屋を成立させている社会的条件を明らかにしていきたいと考えている。そのためには、ペナンで行ったような試行調査を、一つまたは二つの都市を選んで広範囲かつ詳細に調べる必要がある。ペナンは、18世紀末から今日までの長い都市居住と街屋の蓄積があり、非常に興味深い事例である。近年マレイシア連邦政府は土地賃貸規則を改正しようとしており、そうなれば都市構造に大きな変化が生じると考えられる。シンガポールは、イギリス植民地権力の拠点として都市と住宅の改善事業を先行して実施しており、関連の公文書の調査・整理も必要であろう。平成5年から始まった文部省重点領域研究『総合的地域研究手法の確立』に、泉田及びウィドドが「植民地都市の社会史」の部会に参加しており、他分野研究者との交流を通して本研究を発展させたいと考えている。

謝辞

本調査の実施に当たり、パタニではソククラ王子大学パタニ校助教授のケイテ・ラタナジャラナ、ペナンではヘリティジ・トラストのフレディ・リン及びクワン・スイ・ニン、マラッカではバダン・ワリサン・ウク・サリヤ、ジャカルタではイカタン・アーキテクト・インドネシアのマルコの各氏から便宜を受けた。また、本報告書作成に当たり京都大学東南アジア研究センター教授加藤剛氏の助言を得た。ここに謝意を表したい。

<注>

- 1) 拙稿「シンガポール都市計画とショッピングハウス」日本建築学会計画系論文集413号, pp. 161-171, 1990年7月。
- 2) 拙稿「19世紀後半の香港中国人街の連続アーケードの変遷」日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 1077-1078, 1991年9月。
- 3) Widodo, J., Urban Development and the Chinese Settlements in the Northern Coast of Java, Toyota Foundation, 1990.
- 4) Pratiwo, The Architecture of Lasem, M. A. Thesis to Leuven Univ., 1990
- 5) De Haan, Oud Batavia, Batavia, 1919.
- 6) Kohl, D. G., Chinese Architecture in the Straits Settlements and Western Malaya, Singapore, 1984.
- 7) Seow, E. J., Melakan Architecture, Singapore, 1987.
- 8) Urban Redevelopment Authority, A Manual for Chinatown Conservation Area, Singapore, 1988

<研究組織>

主査 泉田 英雄 筑波大学芸術学系 講師
委員 ヨハネス・ウィドド
パラヤンガン大学建築学部
" 黄 俊銘 中原大学建築学系

協力

アレックス・コーニング 建築保存専門家